

証明することができない事柄を信用しない人がいる。科学的でない、という理由からだ。しかし、私たちは科学だけで生きているわけではないし、市場原理だけで暮らしているわけでもない。証明できようができないが、それを信じて勝手に生きることはいっこうに差し支えないのである。そういうわけで、最近とみに常識に合わないことを大事にするようになってきた。どうもそっちのほうの方が自然な生きかたのように思われてならないからだ。

そっちとはなにか。それは直感である。恰好よくいえばヒラメキであり、古い表現をすれば勘となる。むかしは第六感などともいった。動物的な勘、というような言いかたもあるが、私はそこらは採らない。人間的な勘のほうが信用できそうな気がするからだ。動物的な勘、などという、なにか鼻をクンクンさせてあたりを嗅いでまわっているようで、あまり好きになれない。

そんなわけで、自分のこれまでの生活をふり返ってみると、じつに理屈に合わないことばかりやってきた。①自分の内なる声に忠実に、などといえばキザにきこえそうだが、要するに気がすまないことはしない、という一点を頑固に守り通して生きてきたのだ。

A、レントゲンは撮らない、というようなことである。注射も自分の体には良くないと思って避けてきた。検査もしない。そもそも検査ということ自体が、体にとって歓迎できることは考えられないのである。当然、バケガク（化学）的な薬品は体に悪いと考える。②ということは、要するに病院にはできるだけ近づかないように生きるということだ。

そんなこと言ったっておまえさん、歯医者には行ってるだろう、と詰問する友人がいる。それは仕方がない。六十代の半ばにさしかかれば、当然のこととして歯はいかれてくる。人生五十年、というのがむかしの相場だが、まあ、そのへんが人間という存在の耐用限度だろう。少し下駄をはかせて六十歳くらいが人間の寿命の適当なところではあるまいか。歯も眼も下半身も、ガタがくるのは自然の理というものだ。

まあ、そういうわけでまれに歯医者への世話になる。B、それは好んでではない。やむをえず仕方なく行くのであって、③医者にはできるだけ限り近づかないようにするというのが私の方針だ。歯の治療を受ければときとしてレントゲン線も被爆するだろうし、問題のある血液凝固剤を使われる危険性も、いまだに皆無とはいえない。良心的な医師には信じられないことだろうが、世の中には相当おくれた専門家や、いいかげんなプロがごろごろしているものである。

なぜそんなことを偉そうに書くかといえば、世の中には必要もないのにやたらと病院や医者に頼ろうとする人たちが、あまりにも多すぎるからだ。なかには人間ドックや検査が趣味、という向きもあって、せっせと病気を探してもらいに病院に出かけていく。自分で自分の体を守ろうという自立心が欠けている、というのがまず問題なのである。

④病気を探す、ということ自体がそもそも変な気がしてならない。人間というものは、オギャアと生まれたそのときから、すでに病気を抱えて生きているものではないか。世の中に完全に健康な人間などというものはいるわけがない。死は万人にセットされている。哺乳動物にはひとしく五億回あまりの呼吸と百年前後の時間があたえられているだけだ。

C われわれはすべて死の^{*}キャリアとして誕生してくるわけで、これを抑制するクスリも、医学的手段もない。もし老化をストップさせる薬品が出現したとしたら、それを使い、それに頼ること自体が病気といってもいいだろう。

こういうことを書くのは、本当にひどく気がひけることである。不幸にして病に冒され、深刻な闘病生活のなかで必死に生きていらっしやるかたがたには、^{*}傲岸不遜な物言いのように受けとられても仕方がない。しかし私は、必要のない人びとが病院に押しかけたり、自立心を欠いた患者たちが事あるごとに医師や薬に頼ろうとすることにイチャモンをつけているのだ。ちよっと風邪気味だったり、すこし疲労がたまったり、それほどでもない^{*}不定愁訴を感じたりすると、そのたびごとに治療を受け、注射を頼み、薬をもらおうとする安易さが氣にくわなのである。

よくいわれる大病院での三時間待ち三分診療などという話は、まだいいほうだ。ある国立病院の医師が自分の仕事ぶりをチェックしてみたところ、ひとりの患者に二分平均しかさいていないことがわかって、そのことを歎いてる文章を読んだことがあった。これもあまりに多くの市民が気軽に病院に押しかけるからだと思ふ。

本当に仕方がないときしか病院に行かない、それが大事なことになるのだ。医師の世話になるのはギリギリのときだ。やむをえず、仕方がないから診察を受け、医療の世話になるのだという考えかたに立つべきなのである。

さらにいわせてもらえば、むやみやたらと科学や医学に頼るな、ということだ。④科学は常に両刃の剣である。医学や技術の進歩によって救われた命と、それによって失われた命と、はたしてどちらが多いか。私は五分五分だと感じている。医学が作りだす病気もまた少なくないのである。そのことを統計的に証明せよ、と言われても、私にはそれをする気はない。統計や数学もまた現代の大きな病のひとつだと感じるからだ。数字は正直だが、それを扱うのは問題だらけの人間たちではないか。文明の利器と称されるもので、凶器と化す可能性が皆無なものがあったら教えてもらいたいのものだ。

しかし、Xは易くYは難しで、できる限り医師の世話にならないように生きるというのは、それはそれで相当に面倒なことなのである。なにせ万病の巣であるこの体を、自分でコントロールしなければならぬからだ。コントロールするというより、ケアするというか、バランスを保ちつつ折りあっていかねばならない。それを日常の暮らしのなかで行う必要があるのだが、そこは物の考えかたしだいだろう。体とつきあう、体のバランスを保つ、そのことを自分の趣味にしてしまえばいいのである。

趣味といえれば軽くきこえるが、ひょっとしたら生きる目的にもなり、生き甲斐にもなる可能性がある世界だ。さらに踏みこめば自然や宇宙の神秘

に触れるような境地にまで達することができずかもしれない。宗教などというものは、本を読んだり、話をきいたりするだけでなく、案外そんなふうに自分の体の具合にじっと耳を傾けるところから出会うものなのかもしれないと思う。

たとえば、自分というものは二重らせん構造をしている、と考えてみよう。二重らせん構造というのは、もちろん冗談だが、二つの存在が交錯しているところに自分がある、と考えるのだ。ひとつは人間一般としての自分。普遍的な人間の一人としての自分は、たしかに在る。D 人間一般としての常識や、約束ことは当然適用される。病気や健康に関してもそうだ。血圧や、カロリー計算や、その他の医学的理論と治療の方法は、いやでもこれを受け入れなければならない。

しかし、自分にはもうひとつの自分というものがある。人間一般の大枠でくくってしまうことのできない、唯一無二の自分がそれである。この広い世界に、何十億の人間のなかで、なんのナニガシというこの自分が、たったひとりの存在であり、他のだれともちがう自分であることは疑う余地のない事実である。

親ともちがう自分。兄弟ともちがう自分。そして全人類の過去から現在までの時間の流れのなかで、絶対的に一般的人間という概念では律しきれない個としての自分。

そのことを古い仏説では「天上天下唯我独尊」という言葉に託して語っている。この言葉を私は自分ひとりの読みかたで、「全宇宙でただひとり、だれとも同じではない唯一無二の自己であるからこそ、この自分の存在は尊いのだ」というふうに受け止めてきた。こういう強引な読みかたを古くは「横超」と呼んで、ずいぶんいろんな人たちが試みていることだ。

私という自分が二つある、というのは、そういうことである。すべての人間と共通している自分と、だれとも異なるただひとりの自分。その二つの自分は、ときとして対立し、ときとして同調する。

たとえば三十六度八分の熱があったとする。それが自分にとってどういう熱であるかを考えてみよう。人間一般で考える常識的な立場からは、平均的な平熱という基準があるはずである。しかし、個人としての平熱はさまざまだ。私の知人のなかには、五度八分がふつうという人もいれば、常に七度以上が平熱という人もいて絶対に一定ではない。

同じように栄養学ではカロリー計算をするが、個人としての自分にとって何カロリー必要かは各人さまざまだ。限りなく多様なそれぞれの個人に、最適の数値で対応することは病院も学校も不可能だろう。まして市場原理とは、できる限り個を無視するところから成立する発想である。

(五木寛之の文章による。一部改変。)

※キャリア：病原菌やウイルスに感染しながら発病せず、しかも保菌し続ける人。

※傲岸不遜：思い上がって人を見下し、自分を控えめにするものなさま。

※不定愁訴：明白な理由などが見あたらないのに、不快感などさまざまな自覚症状を訴える状態。

問一

——線部①「自分の内なる声に忠実に」とありますが、このような生き方と同様の内容をより具体的に表している表現をこれ以降の本文中より十五字程度で抜き出さない。

問二

——線部②「医者には私の方針だ」とありますが、「医者にはできる限り近づかないようにする」という筆者の「方針」は、筆者のどのような考えに基づいたものですか。次の空欄にあてはまる形で本文中の語句を用いて二十字程度で答えなさい。

「ことが大切だという考え。」

問三

——線部③「病気を探す、ということ自体がそもそも変な気がしてならない」とありますが、筆者はなぜ「変な気が」するのでしょうか。その理由を次のように説明するとき、空欄にあてはまる言葉を本文中の語句を用いて四十文字以内で答えなさい。

「は、あたりまえのことだから。」

問四

——線部④「科学は常に両刃の剣である」という表現で筆者はどのようなことが言いたいのですか。それを次のように説明するとき、空欄にあてはまる言葉を本文中の語句を用いて答えなさい。

「科学技術や医学は、」

① 一方で

②

「こともあるということ。」

問五 — 線部⑤「二つの存在」の指し示す内容を文中より二つ抜き出さない。

問六

——線部「どうもそっちのほうが自然な生きかたのように思われてならない」について、次の問いに答えなさい。
I 筆者の言う「自然な生きかた」とはどのようなものですか。その答えを次のように説明するとき、空欄にあてはまる言葉をそれぞれの指示に従って答えなさい。

「①(本文中より十五字以内で抜き出し)を信じて ②(本文中の言葉を用いて) こと。」

II 筆者が——線部のように言うのはなぜですか。最も適当なものを次ア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 科学や医学といった新しい学問の論理より、人間的な勤の方が伝統ある考え方だから。

イ 科学や医学では説明しきれない個としての存在を認めることだから。

ウ 医師の中には最先端の知識を持たない者やいいかげんな医療を施す者もいるから。

エ 生まれたときから死をセットされているという人間の本来のあり方を認めることだから。

問七

空欄 X ・ Y にあてはまる言葉をそれぞれ一語で答えなさい。

問八

空欄 A S D にあてはまる言葉として適当なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば

イ したがって

ウ すなわち

エ しかし

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 二月のベンチは冷たかった。薄い学生ズボンをとおして、真冬の地面の寒さがじかに伝わってくる。空は薄青く晴れて、雲のかけらも見あたらない。凍りついたように荒れた公園の地面には、すっかり葉を落としたケヤキやソメイヨシノの枝影が、神経質にからみあって落ちていた。なぜ、A 時間どおりに家をでたのに、自分は学校にいけないのだろうか。川本雄吾は誰もいないベンチで身体を硬くしたまま考えていた。いけないのは、きっと考えすぎてしまうことなのだろう。クラスみんなのようになにも考えなければいいのだ。なぜ誰もが同じ制服を着ているのか。なぜ学校指定のカバンをもたなければいけないのか。なぜ四十の机が同じ方向をむいているのか。勉強は別に嫌いではなかったから、授業は気にならないが、なぜ昼休みになるとみなで同じ食器をつかい、同じメニューの給食をとらなければならないのか。そうした疑問が頭の隅をかすめるたびに、雄吾は理由もなく B 笑ってしまうのだった。

自分でもその笑いが一度でてしまうと、どうにもならなかった。② 目のまえにある世界から意味と色が抜け落ちてしまう。中学校の最初の半年はなんとか切り抜けたが、二学期の後半から雄吾は学校を休みがちになっていた。

【両親は共働きで、父の真治は出版社に勤め、母の亜希子は専門学校の講師をしていた。進歩的な知識人ともいうのだろうか。雄吾が学校のばからしさについて話すと、ふたりはすぐに理解を示してくれた。どちらの親も義務教育とはいえ、無理して学校にいけないわなかったのである。

だが、雄吾はその親の対応もまたどこが違うのではないかと感じていた。ばからしさは理解してくれているのだろうが、両親は自分たちの生活は規則正しく律しているのだ。ふたりには家庭よりは仕事のほうが大切なようで、息子に対するのと同じようにお互いについても理性的で冷やかな関係を維持していた。

母はマンションの鍵と昼食代を置いていってくれるし、父は学校にいかなくてもいいから本を読めといって、週に二冊ずつ課題の図書を選ぶのだった。今週はジュール・ヴェルヌの『十五少年漂流記』と幸田文の『流れる』である。漂流つながりだろうか。今も雄吾のカバンのなかには『流れる』の文庫本がはいっていた。文章は見事だけれど、③ 十三歳の男子に芸者の置屋の話を読ませてどうしようというのだろうか。】

雄吾がいつも外で時間を潰すのは、部屋にいと快適すぎてしまうからだだった。ひとりっ子だったので、さして広くはないマンションでも自分の個室があり、部屋のなかにはテレビもパソコンもCDラジカセも、ゲーム機もDVDプレーヤーもあった。マイナスイオンで空気を浄化してくれるエアコンも完備していた。学校でみなと同じことをするのが嫌だという雄吾の気持ちは、社会問題化している④ 引きこもりにも同様に反応した。日本全国で百万人を超える人間が、自宅に引きこもりになっていると新聞で読んだのだ。

だから雄吾は、ひとり公園で冬の空気に身体をさらしていた。中学校から逃げだした自分に、なにか罰を与えたかったのかもしれない。

「ご使用していないテレビ、パソコン、ステレオ、洗濯機、冷蔵庫、電化製品なんでも無料で回収いたします。自転車、ミシン、編み機、ファックス、ご家庭にある不用品なんでもお持ちします」

雄吾のいる児童遊園の外を荷台に錆の浮いた軽トラックが、杖で歩く老人並みの速度で移動していた。植栽越しに目をやると荷台のうえには大型のブラウン管テレビと自転車、軽トラックのせられていた。廃品回収の軽トラックは毎日午前と午後一度ずつこのあたりの住宅街を流しているのだ。

繰り返してメガホンから流れるアナウンスもほとんど暗記してしまっていた。このクルマがくるということは、もうすぐ十一時半だ。雄吾はかじかんだ足でベンチから立ちあがり、公園から十五メートルほど離れたコンビニに昼食を買いにむかった。自転車どめの柵をすり抜けて狭い一方通行路にでる。めずらしいことに七、八台の自動車が数珠つなぎになっていた。

渋滞の原因は、あの軽トラックだった。道端におかれた両開きの大型冷蔵庫をつもくと、男がひとりで奮闘している。ほとんど新品に見える淡いグリーン冷蔵庫だった。

「なにやってんだ、ジジイ」

空車のタクシートの運転手が窓をさけて叫んでいた。軽トラックとタクシートのあいだをすり抜けようと横むきになったとき、雄吾と廃品回収の老人の目があつた。

「お兄さん、いいところにきた。ちょっと手伝ってくれなえかい」

お兄さんとは誰のことなのだろうか。一瞬考えてから、雄吾は C 老人を見つめ返した。六十すぎくらいだろうか、老人というにはちょっと早いかもしれない。建築現場で働く男たちが着るような襟にボアのついたジャンパーは、油や泥の跡が妙に生々しかった。ヤクルト・スワローズの帽子からこぼれる髪は、ほとんど真っ白で、髪の前には汗のしずくがさがっている。

「こづかいやるから、こっちにきて、冷蔵庫のケツをいっしょにもちあげてくれ」

雄吾は返事もせずに、D 軽トラックの後部に近づいていった。老人はしゃがみこんで顔を赤くしている。雄吾も中腰になり、反対側の角に手をいれた。

「いいか、いくぞ。踏ん張れ」

雄吾は息をとめて、両足と背中に力をいれた。全力で引きあげる。緑の大型冷蔵庫がゆっくりと地面を離れると、軽トラックの荷台が沈み、サスペンションの板バネが悲鳴をあげた。冷蔵庫が水平になると、急に重さを感じなくなった。老人は金で縁取られた前歯をのぞかせていった。

「いいぞ。あとは毛布のうえを滑らせておしまいだ」

冷蔵庫を積み終わると、老人は荷台の扉をあげて、雄吾に振りむいた。軍手を脱ぎ、ポケットからなにかをつまみだした。

「ほい、兄ちゃん、ありがとな」

緑色の冷蔵庫は廃品回収にだすとき、まったくふかれてはいなかったようだ。雄吾のてのひらは油で湿ったばかりで黒く染まっていた。老人がそこに金属の音を立てて、硬貨を落とす。汚れた手のなかにちいさな五十円玉が二枚光っていた。

「じゃあな。兄ちゃん、元気だな」

雄吾はなにもいえずに、ぼんやりと走り去っていく軽トラックを見送った。荷台のうしろに八坂サービスと手描きの歪んだ文字ではいつている。渋滞はすぐに解消されて、ひと気のない静かな住宅街がもどってきた。雄吾はコンビニにいくと、カウンターでことわってトイレを借りた。手を洗いたかったのだ。

その日はカップラーメンとおにぎりひとつのいつもの昼食に、もらったばかりの百円で中華まんを買い、それを児童遊園のベンチできれいにたべ終えるころには、あの老人のことなどすっかり忘れていた。

つぎの日も東京は快晴だった。曇りなく明るく晴れるほどに、寒くなっていくのはこの街の冬の不思議だった。雄吾はまた朝九時すぎには指定席になったベンチに座りこんだ。

中学校も、自分の部屋もきちんとあたたかいのに、なぜ自分はこうしているのだろうか。雄吾は意地を張るのもばからしいと思ったが、なぜかそれを笑う気にはなれなかった。目に力をいれて、誰もいない公園の景色をにらむだけである。コンビニの袋と誰かが忘れていった赤いスコップが残された砂場、スロープに泥のなすりつけられた滑り台、強風が吹くと金具が悲鳴をあげる古びたブランコ。広場の中央には時計をのせた金属の柱がぼつんと立っている。二月の午前中の公園には、ちいさな子どもたちの姿さえなかった。

もう寒いのだ。雄吾は思った。みんな、どこかあたたかな場所についてしまって、自分だけがまだ遊び続けようと、④ こんな冷蔵庫のなかみたいに寒い公園で座り続けている。誰も見ていないし、誰も評価などしてくれないだろう。こうして砂場の脇のベンチに座り続けるうちに、自分のことなど忘れてくれたらいいのに……。

「ご使用していないテレビ、パソコン、ステレオ、洗濯機、冷蔵庫、電化製品なんでも無料で回収いたします」

おかしい節のついた老人の声に続いて、公園の植えこみのむこうに白い軽トラックが見えてきた。もうこんな時間だったのか。ひとりで考えていると、時間は急速に流れたり、遅くなったりするのだった。公園の空に浮かんだ時計は十一時半になっている。

雄吾がコンビニにいくとばりばりと音がしそくに固まった腰をあげると、廃品回収の老人が薄いドアに片腕をのせて、声をかけてきた。

「よう、昨日の兄ちゃん。あんた、いつも学校サボって公園にいるな」

それからなにもいわずに汚れた軍手で手招きした。雄吾が軽トラックに近づいていくと新聞紙の包みをわたされた。暖房の吹きだし口の近くでもおいてあったのだろうか。包みは生あたたかかった。老人は金歯を見せて笑った。

「昨日の礼に、兄ちゃん分までにぎり飯をつくってきた。気にせずにくってくれ」

雄吾は湿ってしわくちゃになった新聞の固まりを手に、初めて老人に話しかけた。

「あの、これおじいさんがつくってくれたんですか」

老人がおおきく笑うと、紫色の歯ぐきがむきだしになった。

「おいおい、やめてくれよ。おれはまだ六十二だぜ。おじいさんなんて年じゃあねえ。うちのには先にいかれちまってな。そいつはおれがにぎったんだ」

窓から手を振りながら、軽トラックはいつてしまった。古い型の二槽式洗濯機を積んだうしろ姿に、雄吾はつぶやいた。

「ありがと……ごさいます」

その日は告いりのあたたかな緑茶を買って、もらったおにぎりで昼食にした。公園のベンチで新聞紙を開くと、なかには三角ではなく丸いおにぎりがふたつはいつていた。おおきさは夏みかんほどある。きつと海苔を切るのが面倒だったのだろう。丸々一枚つかって包まれていた。中身はどちらも同じ梅干だ。片方のおにぎりだけひどくしょっぱかったが、しっかりとふたつともたべ切った。

最後にお茶をのみ干して、雄吾は思った。ごはんだけのお昼なのに、^⑤なぜこんなに身体のがあたたかいんだろう。^⑥そのあたたかさは北風が吹き寄せるなか、つぎの三十分消えることはなかった。

翌日は東京の冬にはめずらしく、灰色の雲が厚く空をおおっていた。天気予報では、積もる恐れはないけれど、午後から小雪がちらつくといっていた。雄吾はしっかりと厚着をして、ベンチに座っていた。空は日が沈んだあとのように暗く、風はなくても身体が凍りつくような寒さだった。雪が降りだしたのは、公園についてすぐのことである。

あの軽トラックが公園のまえにやってきたのは、いつもより三十分も早い十一時のことだった。トラックがとまると、老人がおりてきて、公園の隅にある公衆便所をつかった。用を終えて車にもどる途中で、雄吾に気づいたようだった。

「なんだ、雪が降っても公園にいるのか。兄ちゃん、ほかにいくところはなにか」

ほかにいくところなら、いくらでもあった。雄吾はただ自分の意志で、このベンチにただただだけである。だが、老人にすべてを説明するのは面倒だった。雄吾は黙ってうなずいた。

「そうか、なら今日はおれのトラックにのらねえか。あのなかならあったかいし、景色が動くから退屈もしない。もちろん廃品回収は手伝っても

らうがな。どうだ、おれも毎日話し相手がいなくて、つまらねえんだ」

誰かに話しかけられたことも、なにかを誘われたことも、公園にきてから初めてだった。大人の人間と知りあうというのは、こんなに簡単なことなのだろうか。雄吾は立ちあがるといった。

「ありがとごさいます。お邪魔させてもらいます」

〈中略・これをきっかけに雄吾は毎日、老人の廃品回収の手伝いをするようになった。〉

② 雄吾と源ジイの奇妙なコンビは、一年で一番寒さの厳しい二月の二週間をのり切った。そのあいだ雄吾は、すこしずつ家庭環境と不登校の理由を伝え、源ジイは遠くに住む息子とひとり暮らしの日々を話した。

雄吾はこのまま中学を辞めてしまっても、源ジイの廃品回収の仕事を手伝っていいのではないかとぼんやり考えていた。お金にはあまりなりそうもないけれど自由で、いつでも自分の好きな街を見ていられるのだ。悪い仕事ではなかった。

だが、そんな雄吾の計画を吹き飛ばすような出来事が突然やってきた。悪い運が楽しい日々の代償を取り立てにきたのである。

その日は朝から源ジイの顔色が悪かった。カゼ気味でどうも調子がでないという。雄吾は老人を運転に専念させ、代わりに自分がこまめに回収に動いた。不思議に調子のいい日で、午前中だけで荷台がいっぱいになってしまった。源ジイはいった。

「身体もだるいし、今日はこれまでだな」

小学校の横の立派な屋敷のまえにビデオデッキと小型テレビが置いてある。若い男が手をあげていた。軽トラがくるのを確認すると屋敷にはいつてしまふ。

「いつてるときは、こんなもんだな。あいつを最後に積んで今日は手仕舞いだ。こづかいやるから、雄吾は映画でも観にいきな」

飛ぶように助手席をおりと雄吾はデッキをもちあげて、軽トラックにもどろうとした。クラクションが鳴ったのはそのときである。めったにきくことのない軽トラのかん高い警笛だった。一瞬ではやまずに、ずっと鳴り続けている。なんだろう、このビデオデッキは必要のない品物なのか。雄吾は足早に荷台にデッキを積んで、運転席にまわった。そのあいだもやむことなくクラクションは鳴り響いている。通行人も怪訝な顔で錆の浮いたハ坂サービスのトラックを見つめていた。

運転席をのぞくと源ジイがハンドルに頭を垂れていた。額がクラクションを押しているのだ。意識はないようだった。雄吾は老人の肩をつかんで、頭をハンドルからあげた。^⑦静かになった住宅街に、今度は雄吾の声が響いた。

「源ジイ、源ジイ、どうしたの」

老人は目を開けなかった。意識がもどることもなかった。反応はない。倒れたときにぶつけたのだろうか、鼻の穴から血がひと筋流れているだけだった。雄吾は通行人の誰かれなく叫んでいた。

「携帯をもっている人、救急車を呼んでください。お願いします」

十分後には大久保通りを近づいてくるサイレンがきこえた。ドップラー効果は近づくほど周波数が高くなるのだっけ。生まれてから一番長い十分間をすごしたのに、頭のなかにつまらない雑学が浮かぶ。人の心というのはおかしなものだ。

救急隊員は雄吾にいった。

「この人の名前は」

「八坂源一です」

脈を取り、目を開いて光りをあてながら、八坂さん、八坂さんと隊員は呼びかけていた。

〈中略〉

③「八坂さんは、どういう病気なんですか」

看護師はしかたないという様子でうなずくと、口を開いた。

「脳血栓といって、脳の血管に血液の固まりが詰まってしまう病気。患者さんと面会したら、今日は遅いからもう帰りなさい。家の人が心配しているわよ」

雄吾はインテリア雑誌から切り抜いたような自宅マンションを思い浮かべた。七時近くまで両親は家に帰ることはないだろう。母の亜希子が

十五分で作る夕食は半分以上が冷凍食品だった。栄養はあるのかもしれないが、味も香りも漂白したように抜け落ちている。

雄吾は開いたままの扉を抜けて、救急治療室のなかにはいった。

「だいじょうぶですか」

雄吾がすこしだけカーテンを開くと、老人は枕から頭を起こして涙目で見つめ返してきた。半日まえとはまったく違う力のない視線である。老人は右手をあげて、おにぎりくれた日のように雄吾を招いた。

「すまねえな。こんなことになるとは、自分でも情けねえや。兄ちゃんがいなかったら、どうにもならんところだった」

そういうと老人は右手だけでサイドテーブルにある財布を開いた。なかからでてきたのは、なくなった妻の写真である。裏返して雄吾に差し出した。

「ここに大阪に住んでる息子の電話番号がある。仕事でずっと関西でな。やつがくるまで、悪いが、こまこまとした用をやってくれないか」

翌日から雄吾の仕事は、廃品回収から源ジイのつきそいに変わった。電話を受けた老人のひとり息子、仕事がいそがしくて週末まで東京にこられないといった。入院に必要な寝巻きやタオルや下着などは、病院の売店ですべて雄吾が買ってきたものだ。入院二日目には、雄吾の両親も老人の見舞いに顔をだしている。源ジイはふたりのまえでは、雄吾のときとは別人のように話した。

「すみません。息子さんが毎日公園にいるものだから、つい仕事の手伝いなんかをさせてしまっただけ。あげくの果てにこの始末です。天罰つてやつかもしれません」

真治は黙っていたが、亜希子が口を開いた。

「いえ。うちの子もちょっと変わっていて。八坂さんの仕事を手伝うようになってから、家でもまえより明るくなっていたんです。このごろちょっと変わったねって、夫とは話していました」

源ジイは照れたように笑ったが、真治の声は真剣だった。

「残念ですが、雄吾はまだ中学生です。アルバイトとしてつかうのも、こうして血のつながりのない八坂さんを看病するのも、どういえばいいか、適切ではないと思います。雄吾のつきそいは、息子さんがおみえになる週末までいいでしょうか」

上半身をベッドに起こした老人は、何度もうなずいてみせた。

「わかっております。そのあとは、ちゃんと雄吾くんはお返しますから。ご安心ください」

その場にいた雄吾は、誰も自分の意見をきかないのが不思議だった。④十三歳というだけで、透明人間にでもなったような気がする。口のなかでつぶやいた。

「同じじゃないか」

亜希子が振り返った。雄吾が今度ははっきりといった。

「同じじゃないかっていったんだ。どうせ X にもどるなら、 Y 同じだよ。どっちにしても学校にはいかないんだから」

そのときベッドの老人が、腹から太い声をだした。

「おい、兄ちゃん。親御さんにそんな口をきいちゃいけない」

雄吾は三人の大人を交互に見てから、黙って病室をでていった。

※置屋：芸者を宴会などへ派遣する派遣元。

問一——線部①「目のまえにある世界から意味と色が抜け落ちてしまふ」という表現から読み取れる、雄吾の心情として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 規則を、破られるためにあるものであるととらえる反抗心。
- イ 何も考えていないクラスのみんなに対する、軽べつの気持ち。
- ウ 自分に対して理解があるふりをしている親に対する不満。
- エ 学校を、自分にとって意義のないものであると考える空しさ。

問二——①段落の「——」の部分から、雄吾は自らの家庭環境をどのように感じていると考えられますか。それを象徴的に表している二十五字程度の語句を、③段落より探し、その最初と最後の五字ずつを答えなさい。

問三——線部②「十三歳の男子に芸者の置屋の話を読ませてどうしようというのだろう」とありますが、ここから読み取れる父親に対する雄吾の心情として最も適当なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 本の内容も考えず、形式的になることをさせようとしているだけで、本当に自分のことを考えてくれているわけではないととらえている。
- イ 学校へ登校しようとしないうちに自分に理解を示し、それならば広い社会のことを学ばせようと考えて、真剣に向き合ってくれているととらえている。

ウ 本を読ませることで大人の暗い部分を感じ取らせ、言葉では言わないが学校へ戻るように暗に示しており、直接は見せないやさしさを感じている。

エ 良い本を選ぶことで父親の威厳を誇ろうとしており、息子の自分に対しても自己主張が強い人物ととらえ、うんざりしている。

問四——線部③「引きこもりにも同様に反応した」とはどういうことですか。わかりやすく説明しなさい。

問五——線部④「こんな冷蔵庫のなかみたいに寒い公園で座り続けている」とありますが、なぜ雄吾はあえてこのような行動を続けているのですか。その理由が読み取れる一文を、本文中のこれ以前の部分より探し、最初の五字を答えなさい(句読点・記号も字数に数えます)。

問六——線部⑤「なぜこんなに身体のなかがあたたかいんだろう」とありますが、雄吾の感じた温かさの原因は何だと考えられますか。簡潔に答えなさい。

問七——線部⑥「そのあたたかさは北風が吹き寄せるなか、つぎの三十分消えることはなかった」とありますが、これと対照的な描写を、これ以前の本文中より一文で抜き出し、その最初の五字を答えなさい(句読点・記号も字数に数えます)。

問八——線部⑦「静かになった住宅街に、今度は雄吾の声が響いた」とありますが、「源ジイが倒れた時の雄吾の衝撃」を最もよく表している十三字の語句を、②段落のこれ以降の本文中より抜き出しなさい。

問九——線部⑧「母の亜希子が、抜け落ちていく」について、次の問いに答えなさい。

- I こうした食事の様子から、雄吾が感じているのはどのようなことですか。次のア～エから選び、記号で答えなさい。
- ア おいしいとは言えないが、バランスだけは考慮した食事を作ってくれる母のありがたみ。
- イ 仕事で疲れている母の、何とか栄養だけは取らせようという義務感。
- ウ 仕事を優先している母の、家庭や食卓の体裁だけを整えようという白々しさ。
- エ 食事を楽しむものとしてではなく、栄養をとるためのものと割り切る母のそっけなさ。

Ⅱ——線部⑧に抱いている雄吾の印象とは対照的な描写を、①段落の本文中より一文で探し、その最初の五字を答えなさい(句読点・記号も字数に数えます)。

問十——線部⑨「十三歳というだけで、透明人間にでもなったような気がする」とありますが、このときの雄吾の心情として最も適当なものを、次ア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 子どもであるという理由だけで特別扱いをする大人たちへのいらだち。

イ 自分の気持ちを理解してくれてはいるが受け入れてくれない大人たちに対する怒り。

ウ 大人たちが自分の気持ちを知らないうちに無視して、勝手に話を進めていることに対する反発。

エ 当事者の自分が不在のまま、大人たちの間だけで取り決めがなされることに対する違和感。

問十一 空欄 ☐ X ☐ Y にあてはまる言葉の組み合わせとしてふさわしいものを、次ア～エから選び、記号で答えなさい。

ア X 家

Y 公園のベンチにすわっていても

イ X 学校

Y 公園のベンチにすわっていても

ウ X 公園のベンチ

Y この病院の廊下の長いすにすわっていても

エ X 廃品回収のトラックのいす

Y この病院の廊下の長いすにすわっていても

問十二 空欄 ☐ A ☐ D にあてはまる言葉として適当なものを、次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア ぼんやりと

イ へらへらと

ウ ふらふらと

エ きちんと

三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

① 人エイセイを打ち上げる。

② 学校でにわとりをシイクする。

③ ダンゼン彼がトップでのゴールだ。

④ 先生にミチビかれて入場する。

⑤ 新聞を読み世界ジョウセイを知る。

四

次の①～⑤の——線部の読みをひらがなで書きなさい。

① 締め切りの人数まで若干の余裕がある。

② 親は子どもが健やかに育つことを願う。

③ 窓から見える趣のある冬景色。

④ 君の陶芸の腕は素人の域を超えている。

⑤ 地震で甚だしい被害を受けた。

五

次の①～⑤の□に適当な漢数字を入れてことわざを完成させなさい。

- ① □の足をふむ。
- ② 三つ子の魂□まで。
- ③ □里の道も一歩から。
- ④ 早起きは□文の得。
- ⑤ 一寸の虫にも□分の魂。